

**<起源神話>としての明治維新:大逆事件の衝撃と波紋(シンポジウム「近代日本の『神話』とナショナリズム」)**

著者名(日)	宮澤 誠一
雑誌名	教養研究
巻	15
号	2
ページ	5-27
発行年	2008-12
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1265/00000473/">http://id.nii.ac.jp/1265/00000473/</a>

# 〈起源神話〉としての明治維新

## —大逆事件の衝撃と波紋—

宮 澤 誠 一

### はじめに

日本の近代史の一つの特質は、明治維新というものが、単に近代日本の出発点であるばかりでなく、現状に不満をいだき既存の社会を変革してナショナル・アイデンティティーをつくっていかうと思う人びとにとっては、国民が絶えず立ち帰るべき理想的な原点＝〈起源神話〉として機能していたところにある。それが、近代日本において繰り返し起こるいわゆる「第二維新」の運動である。そして〈神話〉というものが、相矛盾する要素を統合するための知的な装置であるとするならば、明治維新とその後の近代化の過程で明治国家の支配層とイデオログによって創られた近代日本の〈神話〉とは、結局のところ、空間的には「天皇親政」（権力の集中）と「公議輿論」（権力基盤の拡大）、時間的には「王政復古」（復古）と「文明開化」（維新）という明治政府の矛盾する理念を統合する性格を有していたのではないかと思われる。近代の天皇は、それらの理念を統合する役割を果たしてきたと考えられる。このような性格の近代日本の〈神話〉の枠組みは、維新政権が誕生する時期に形成され、自由民権運動の弾圧を経て、大日本帝国憲法においていちおう完成する。 付録の図を参照。

私の報告は、そういう仮定にたって、明治政府の権力を正当化する諸理念が幕末維新の政治過程のなかで、どのようにして創出されたのか、また「明治維新」の歴史事象やそれに関係した人物が、自由民権運動いらいの歴史的諸事件

のなかで、近代日本の〈起源神話〉としてどのように「想起」され、あるいはまた歴史書や文学作品などによってどのように物語られ表象されていったかを探ることにある（拙著『明治維新の再創造』青木書店、2005年）。その場合、近代日本の分水嶺といわれる明治末期のいわゆる「大逆事件」に焦点を当ててお話するのは、第一に、この事件がのちの「大正維新」の運動や「昭和維新」の運動に関係すると同時に、近代日本の〈神話〉の内容を変え、その枠組みを突き崩す芽を持っていたのではないかということ、第二に、この事件が政治的事件であつたばかりでなく、多くのロマン主義的な文学者たちを巻き込む文学的事件でもあつたために、幕末維新像の造型にも、長期にわたって甚大な影響を及ぼしたからである。

そこでまず、こうした近代日本の〈神話〉が生まれる前提となる「天皇親政」と「公議輿論」という維新政権を正当化する理念が、いつどのようにして形成されてきたかという問題をごく簡単に説明してみたいと思う。

## 一 王政復古の大本令と五箇条の誓文

明治維新の理念は、1853（嘉永6）年6月3日（旧暦、以下同様）にペリー艦隊が浦賀に來航した際に、老中首座の阿部正弘がとつた挙国一致のための政策、朝廷への報告と大名・旗本への諮問に、その形成の端緒がみられる。その後、安政の大獄を初めとする八月一八日の政変・禁門の変・2度の幕長戦争といった歴史的な諸事件のなかで、幕末の志士や経世家たちが、自己の思想と行動を正当化するために、あるいは将来の近代国家を構想するために、日本と欧米のさまざまな歴史上の人物を想起している。たとえば、日本では、神武天皇のような神話・伝説上の人物から中世の北条時宗・後醍醐天皇・楠木正成などであり、概ね日本を建国したり中興したりしたとされる天皇やそれに忠義を尽くした人物である。また欧米では、フランスのナポレオン皇帝・アメリカのワシントン大統領・ロシアのピョートル大帝など、それぞれの国の近代国家の建設に

大きな力を発揮した人物である。つまり、明治維新の諸理念は、志士や経世家たちが幕末の動乱の渦中で、近代日本の方向がはっきり見えないまま、欧米諸国という強力な「他者」を意識しつつ、こうした国内外のさまざまな「過去の亡霊」(マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』)を呼び起こすことを通して次第に形成されていったのである。

なかでも、安政の大獄で捕らえられる前に、吉田松陰がナポレオンを想起して「フレーヘッド」(自由)を唱えなければ腹の虫が治まらないといい、「今の幕府も諸侯も最早酔人なれば扶持の術なし。草莽崛起の人を望む外頼なし」(『北山安世宛書簡』)と言った有名な一句は、日本の独立を守るのに幕府も大名も頼りにならず、「草莽」という民間の志士の決起に求めたことは重要である。維新変革の主体としての「草莽」が明確に立ち現れたからである。また、坂本龍馬が後藤象二郎に与えたこれまた有名ないわゆる「船中八策」(1867年6月)も大切である。ここに、近代ヨーロッパの議会制度を雄藩諸侯の協議体制に読み変えて、中央集権的で立憲的な国家を樹立する構想が初めて見られるからである。しかし、明治維新の諸理念が構造化され、近代日本の〈神話〉の枠組みがつくられるのは、1867(慶応3)年12月9日のいわゆる王政復古の大本营から翌年の3月14日の「億兆安撫の宸翰」と五箇条の誓文にいたる維新政権が誕生する短い時期であったと思われる。それは、幕末維新の政局という視点を離れて歴史のより広い文脈から見れば、欧米列強の「外圧」のもとで、百姓一揆や打ちこわしの闘争にみられる「世直し」という民衆の強い変革願望への維新政府の「御一新」を掲げた権力的対応という性格をもっていたのである。そして、その民衆の「世直し」闘争は、さらに明治初年の新政反対一揆を経て自由民権運動の最大の激化事件である秩父事件へとつながっていく。

そもそも「王政復古」という構想自体は、安政の大獄いろいろの幕末の動乱のなかで、武力で幕府を倒し天皇政治を実現するというものから、徳川将軍が主宰する雄藩連合政権を樹立するというものまで多様なかたちで存在していた。そして、そのときに尊攘・倒幕派の志士や公家が念頭においていた「復古」と

は、ほとんどが「建武の中興」への回帰を意味しており、かれらは楠木正成などの「忠臣」の遺志を継承するつもりで政治運動に奔走していたのである。それが、1867（慶応3）年9月に倒幕派の公卿たちが「王政復古ノ大業」を密かに図る段階で、国学者・玉松操の助言を入れて、岩倉具視が「復古」の理念を神武天皇の始源の政治に基づいて「万機ノ維新」を行うことに変えたのである（『岩倉公実記』中巻、1906年）。このことは、明治維新の変革が、天皇の神権的權威に正統性の根拠を求め、神武天皇の「祭政一致」の政治に帰するという名目で古代的で宗教的な性格が濃厚になる面とともに、神武天皇の政治の内容が具体的にほとんどわからないので、欧米諸国に倣らって近代的で抜本的な改革を可能とする面との両様の性格をもつことになった。そして、その「建武の中興」と今度の「王政復古」の違いを変革の主体に着目して論じたのが、戊辰戦争のさなかに在野の「草莽」の立場から書かれた小冊子『復古論』（1868年8月）である。すなわち、前者が後醍醐天皇の考えから出たために失敗したのに対し、後者は「下万民ノ心」＝「草莽の発起」から生まれたので、たとえ天皇や諸侯の考えが変わっても、「万民ノ心」が変わらないかぎり、武家の政治に戻る「道理」はないと述べている。

このように、明治初年においては「復古」と「維新」という相反する理念が同時に存在し、しかもそれがともに現状打破という目的で一致し、相互に補完しあっている。それは突き詰めて言えば、「国民国家」を形成しようとする近代のナショナリズムそのものが、こうした過去へ遡行することを通して未来に向かって前進するという固有の論理を有していたからである。そして、この過去への遡行が民族の神話的起源まで溯り、神武天皇の「建国神話」として天皇制国家の正統性を主張するところに、近代日本の〈神話〉の一つの大きな特質がある。

さて、王政復古の大号令には、この「王政復古」とともに「百事御一新」という相反する語句がみられるばかりでなく、「神武創業之始ニ原ツキ」とともに「至当ノ公議ヲ竭シ」という矛盾する語句もみられるが、しかし、維新政権は、

こうした諸理念を天皇という人格において統合することによって、幕藩体制を否定する自己の権力を正当化しようとしていたのである。この王政復古の号令を踏まえて「億兆安撫の宸翰」で万国に対峙して国威を海外に輝かすために「一君万民」思想に基づく「天皇親政」の理念を前面に打ち出すとともに、五箇条の誓文の有名な第1条で「広く会議ヲ興シ、万機公論ニ決スベシ」と「公議輿論」の理念を高らかに謳いあげている。

このように、「大号令」と「宸翰」と「誓文」は、いわば三位一体となって維新権力を正当化する理念を構築するのであるが、その際、ここで二つ注意しておきたいことがある。一つは、王政復古の大号令のあとで行われた小御所会議において、前將軍徳川慶喜を朝議に参加させるかどうかをめぐるなされた有名な一挿話についてである。つまり、公議政体派の前土佐藩主の山内容堂が、岩倉具視ら倒幕派の公卿が「幼沖ノ天子ヲ擁シテ権柄ヲ竊取セン」としていると激しく非難したときに、岩倉が天皇は「不世出ノ英材」で、王政復古の大号令はことごとく天皇の「宸断」によると容堂を一喝した、というものである。これが、近年の研究（高橋秀直『幕末維新の政治と天皇』吉川弘文館、2007年）によると、天皇の超越的権威を創出するために岩倉のちに作為した虚構の場面であることが指摘されている。その点では、これも近代日本の〈神話〉の創出過程を語る一つの重要なエピソードということになる。

もう一つは「天皇親政」と「公議輿論」の関係についてである。よく知られているように、五箇条の誓文の理念に基づいて1868（慶応4）年の閏4月21日に政体書は公布され、上・下二局の立法機関が設けられるが、9月には早くも議政官は廃止になる。その後、紆余曲折をへて諸藩の意向を統合するために12月に設けられた公議所でさえも、翌年7月の官制改革で集議院と改称され、のちに左院に吸収されてしまう。そして、1871（明治4）年7月に廃藩置県が断行され、有司専制化が強まると「天皇親政」の理念と「公議輿論」の理念は分裂し、後者が弱まり制度的保証がなくなってしまったので、1874（明治7）年1月に、天皇と人民の中間に介在して権力を独占する「有司」を排除しようと

して、いわゆる「征韓論」に敗れた板垣退助らは民撰議院設立建白書を左院に提出するのである。つまり、維新政権の「天皇親政」の理念と「公議輿論」の理念は当初から矛盾をはらんで対立していたのであり、たとえば「新しい歴史教科書をつくる会」の指導者の一人である坂本多加雄が、明治の初期においては「天皇親政とは公議輿論の尊重である、という調和と統合の原理が働いている」（『明治国家の建設』〈日本の近代2〉の付録、中央公論社、1998年）というように、両者が一体化し調和していたとは決して言えないのである。

## 二 自由民権運動と明治の「第二維新」

自由民権運動の評価は、1990年代の新たなナショナリズムの台頭に伴って、たとえば、それに批判的な安丸良夫の「民権＝国権」型ナショナリズム（『近代天皇像の形成』岩波書店、1992年）のように、植木枝盛などを除いて天皇制否定の言説がほとんどなかったせいもあって、自由民権運動におけるブルジョア民主主義革命の意義づけが後退するぶんだけ、ますます近代天皇制へ向かうナショナリズム的评价に傾いていくようにみえる。しかし、その場合とくに留意しなければならないのは、民撰議院設立の建白書自体がある屈折を帯びていたことである。すなわち、イギリスから帰朝した古沢滋が起草した原案には「君主専制を咎める」言葉があったけれども、それを板垣が副島種臣に見せたところ強く反対されたので、結局、副島の意見に従って「君主専制」を「有司専制」の字句に書き改めたことである（大津淳一郎『大日本憲法政史』第1巻、宝文館、1927年）。こうして自由民権運動がまさに始まろうとする瞬間に、早くも天皇制の批判がタブー視され、批判の鋒先が専ら権力を掌握した大久保利通ら明治政府の官僚＝「有司」に向けられることになったのである。そして、1880（明治13）年7月に公布された刑法（旧刑法）の「不敬罪」の発動によって、天皇制への批判は、ますます窒息させられていくことになる。

民権家の多くは、維新変革の精神は薩長の藩閥政府によって歪曲され、挫折

させられたとして、五箇条の誓文に依拠して国会の開設などを主張する広い意味での「第二維新」の運動を展開したが、その早いものとして「政府の独裁」を廃して人民を政治に関わらせる「君民共治」の政治を行うべきであるという植木枝盛の「明治第二ノ改革ヲ希望スルノ論」(『海南新誌』第5号、1877年9月22日)などがある。また、自由民権運動が弾圧され激化事件が続発するなかで、土佐の民権家の坂崎紫瀾が坂本龍馬を主人公にして書いた政治小説『汗血千里駒』(摂陽堂、1883年)では、龍馬を「天賦同等の感情」から封建制を打破し、近代国家を創出しようと奮闘して非業の最期を遂げた人物として描いている。中江兆民が、薩長連合に尽力した龍馬に倣って「自由改進黨の二党」の連合を計り、藩閥政府を打倒しようとしたのも「第二維新の業」(幸徳秋水『兆民先生』1902年)を成就するためであった。先の「船中八策」を書いて近代日本の国家構想を示した坂本龍馬こそは、土佐の民権家たちにとって誇るべき先駆者だったのである。さらに、1882(明治15)年に、樽井藤吉は、長崎で没落農民を組織して東洋社会党を結成してすぐに禁止され投獄されるが、大井憲太郎らの大阪事件に連座した後に『大東合邦論』(1893年)を刊行する。それは、日本と朝鮮と中国が連帯して欧米列強の侵略に対抗することを説く、旧民権左派によるナショナリズムのアジア的展開といえよう。

ところで、私たちに馴染みぶかい「明治維新」という言葉は、一体いつどのような歴史的な背景のもとに誕生したのであろうか。「明治」という元号の出典が『易経』の「聖人南面而聴<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>、嚮<sub>レ</sub>明而治」に、また「維新」が『詩経』の「周雖<sub>二</sub>旧邦<sub>一</sub>、其命維新」にあることは、よく知られている。そして、ここでの「維新」(「維れ新たなり」)は一般的な革新という意味ではなく、この『詩経』の原義に基づいて、長い武家政治が終わり「天皇親政」がようやく実現したという特別な意味を有していたのである(一海知義「明治維新」という言葉』『環』13巻増大号、2003年 Spring)。だが、明治初年の史料には、この元号の「明治」と「維新」の両者を結合した「明治維新」という言葉はみつからないようで、その最も早い事例の一つは、1878(明治11)年に刊行された児島彰二の『民権問答』



(二編、上巻)ではないかと言われている(江村栄一「自由民権を考える」『近代日本の軌跡2』所収)。しかし「明治維新」という語が「王政復古」史観と結合して明治政府の内部で用いられ始めるのは、岩倉具視の建議によって宮内省の編纂局が、わが国固有の「国体」を解明するために『大政紀要』の編纂を開始した1883(明治16)年頃からでないかと思われる(大久保利謙「明治憲法の制定過程と国体論」『日本近代史学の成立』1988年)。もしそうだとしたら、この「明治維新」という言葉は、明治一四年の政変後の憲法制定議論を前にして、自由民権運動の高揚に対抗する支配者の側による危機意識の一つの表れだったとも言えよう。そして、伊藤博文らがプロシヤの立憲君主制に範をとって起草した大日本帝国憲法において、近代日本の正統的な〈神話〉は、天皇の神聖不可侵性を強調する君権主義と大きく機能を制約された議會主義の統合という形態をとっていちおう完成するのである。

さて、話をまた元に戻すと、自由民権運動を屈折したかたちで継承した民友社の人たちも、盛んに「第二の維新」を唱えて政府を批判した。人見一郎は、その名も『第二ノ維新』(民友社、1893年)という本を書き「公議輿論」を尊重した「維新の精神」は、はやくも版籍奉還後の官制改革で後退し始め、西南戦争後には逆行してしまったとし、「選挙権と、富と、言論」の力で「第二ノ維新」を実現しなければならないと主張する。また、竹越与三郎は『新日本史』上・中(民友社、1891~92年、下巻は未刊)で、明治維新はフランス革命やアメリカの独立革命と違って明確な理想をもたない民衆の変革的な力を底流とする「乱世的革命」であるとし、「平民主義」の立場から、腐敗・墮落してしまった薩長の藩閥政府を糾弾している。松陰を「維新革命」の急先峰と位置づける徳富蘇峰の『吉田松陰』(民友社、1893年)も、こうした「第二ノ維新」を期待して書かれたもので、それはのちに、明治維新にならって元老・重臣・政党の指導者や財閥の首脳を排除する「昭和維新」を唱える青年将校や「革新」右翼ばかりでなく、中国の「変法維新」運動の指導者・康有為などにも影響を与えることになる。また、自由民権期に徳富が熊本で開いた大江義塾で学んだ宮崎滔天も、「第二維

新」の延長として「支那革命」を志し、この「変法維新」運動が失敗して日本に亡命する康有為を助けたり、東京に来ていた中国革命の両雄である孫文と黃興とを結ばせて中国革命同盟会を成立させたり、孫文の惠州挙兵に参加するなど、中国の革命運動に尽力する（宮崎滔天『支那革命軍談』明治出版社、1911年）。

こうした言論・思想界に大きな力を発揮した徳富蘇峰を初めとする民友社の論客たちも、1894（明治27）年7月に日清戦争が始まると、平民主義的な思想から「帝国主義」的な思想に変わっていく。徳富の『吉田松陰』も、1908（明治41）年の改訂版では、明治維新は「革命」ではなく「改革」とされ、それも「日本国民」が天皇と国家のために献身した特別な時代と位置づけられ、松陰の「革命」性も否定されてしまうのである。徳富のこのような明治維新観の変化と歩調を合わせるが如く、日露戦争後になると、藩閥政府と「主権の所在」をめぐって争った自由民権運動の指導者たちによる近代天皇制の帝国主義的な書物も刊行される（田中彰『明治維新観の研究』、北海道大学図書刊行会、1987年）。日本の朝鮮や中国の侵略を文明論的に正当化する大隈重信が編集した大著『開国五十年史』（開国五十年史発行所、1907～08年）と、板垣退助監修の「維新改革の精神」を日清・日露戦争の勝利につなげて賛美する『自由党史』（五車楼、1910年）がそれである。また、とくに日清戦争以後、明治天皇の権威が急速に確立し、明治末期には国定教科書による天皇制教育や日露戦争の影響などによって、民衆のナショナリズムが喚起され、帝国主義的な発展に利用されていくのである（色川大吉「日本ナショナリズム論」『岩波講座 日本歴史17』、1976年）。

しかし、こうした国家主義的な動きが強まるなかで、同じく若い時に自由民権運動の体験をしながらも、民友社系の人びととは異なる民衆的な立場にたった新たな維新観も生まれてくる。初期ロマン派の詩人で思想家の北村透谷は『明治文学管見』（『評論』1893年4～5月）で、「維新の革命」は「精神の自由」を求める平民の力によって徳川封建体制を倒し、身分制を廃止して「国民」を創出した「前古未曾有の革命」であったけれども、その結果生まれた明治国家は、天皇一人しか「自由」がない専制的な国家になってしまった、とこれを厳しく

批判している。だから、透谷は半年後の「漫罵」では「今の時代は物質的の革命によりて、その精神を奪はれつゝあるなり」といい、その「革命」は欧米列強の外圧によってもたらされたものであり、正しくは「革命」にあらずして「移動」に過ぎないと、明治維新らしい日本の近代化の評価を逆転するかのような「国民」に対する強い怒りと深い嘆きの言葉を発しているのである。ここには、若き透谷の自由民権運動の挫折体験と、その後の変革主体の方向を見通せない苦悩が写し出されているように思われる。また、そうした透谷の天皇観を承けるかのように、ロマン主義的な思想家である田岡嶺雲も、日露戦争中に刊行した『壺中観』（嵩山房、1905年）で強く天皇制を批判したため、度重なる発売禁止の処分を受けたが、それに屈せず1909（明治42）年に、武力反乱を起こして捕縛・投獄された自由党左派の人びとの伝記を書いた『明治叛臣伝』（日高有倫堂）を刊行している。この『明治叛臣伝』が刊行された翌年5月に、田岡嶺雲と同郷の親友である幸徳秋水をはじめ12名の社会主義者や無政府主義者たちが、明治天皇暗殺計画の容疑で捕縛されて処刑された大逆事件が勃発する。幸徳秋水は、日本の帝国主義国家の打倒を主張するばかりでなく、中国の留学生たちに清国政府を倒し民主的な社会を建設するように呼びかけたり、朝鮮の自由と独立を妨げる日本政府に抗議するなど、広く東アジアの革命運動を支援していたので、明治政府から最も危険な人物と見做されていたのである。

### 三 大逆事件の衝撃と波紋（Ⅰ）

いわゆる「大逆事件」は、実際には宮下太吉・菅野すが・新村忠雄による夢想的な天皇暗殺計画に過ぎなかったにもかかわらず、社会主義運動の台頭を危惧する桂内閣とその背後にいる元老の山県有朋らによって、意図的に拡大された事件であったことはよく知られている。湯河原温泉の天野屋に滞在していた幸徳秋水は、1910（明治43）年6月1日に、信州で宮下が起こした爆発物取締法違反の事件を支援するために上京しようとした際に、高等警察の警部によっ

て逮捕されたが、そのとき我が身と比べて想起した人物は、意外にも、最後の士族反乱といわれる西南戦争で死んだ西郷隆盛であった。それには、かつて師の中江兆民が西郷を擁立して明治の専制政府を打倒しようとしたことと関係しているように思われる。この時、たまたま同じ天野屋で脊椎カリエスのため療養していた田岡嶺雲も任意同行を求められたが、病気のためたいした取り調べも受けずに釈放された。その後、幸徳は獄中で書いた絶筆「死刑の前」のなかで、世界の暗黒裁判の事例をいくつか挙げた後、おそらく安政の大獄で処刑された吉田松陰などを念頭におきながら、死刑が時には「栄光」でさえあると述べ、政治裁判の不当性について強く抗議している。

ここでさらに興味深いのは、幸徳の処刑に西郷の死を重ね合わせて考える文学者や知識人が意外と多いことである。それは、西郷の死のなかに、下からの体制批判なナショナリズムの挫折した姿をみるからであろう。たとえば『明星』派の歌人で『スバル』の同人でもある弁護士の中野実から極秘で幸徳秋水の陳弁書をみせてもらった石川啄木は「幸徳は決して自ら今度のような無謀を敢てする男ではない。(中略) 幸徳と西郷！ こんなことが思われる」と翌年の1月5日の日記に書いている。また、第一高等学校で「謀叛論」という有名な講演をした作家の徳富蘆花も、幸徳らを陰険なやり方で「謀叛人」に陥れて処刑したのは「死刑」ではなく「暗殺」であるといい、かれらは誤って「乱臣賊子」となったが、後世の人は、西郷と同様に「必ずその事を惜しんで、その志を悲しむであろう」と述べている。そして、天皇制国家の本質を洞察した啄木が大逆事件を契機に「国家社会主義」に近づき、蘆花が天皇を擁して改革を行う「国家社会主義」を唱えるなど、いづれも、思想的立場を異にししながら、後に「昭和維新」の運動に大きな影響を与えた北一輝の国家社会主義の思想に接近していくのである。しかも、若い時に『国体論及び純正社会主義』（自家版、1906年）を著し、既存の国体論を厳しく批判したためすぐに発禁処分を受け、その後、幸徳秋水ら無政府主義者と交わっていた当の北一輝自身も、官憲から大逆事件との関係を疑われ、危うく難を逃れたのである。

他方、平民社の社会主義に対抗して「国家社会主義」を説いた民友社の史論家・山路愛山は、幸徳が捕縛された半月後に『西郷隆盛』上巻（玄黄社、下巻は未完）を刊行している。その愛山が創刊した『国民雑誌』（1912年2月）に、1908（明治41）年6月の赤旗事件で獄中であつたため起訴をまぬがれた堺利彦は「唯物的歴史観研究」を書き、明治維新の本質が西欧と同様なブルジョア革命であつたにもかかわらず、外圧によって革命の機が熟さないまま行われたため、その「時代精神」は「尊王攘夷の説」になったと説いている。また同じく幸徳が捕縛された3ヶ月後には、在野の史家・吉田東伍は、明治維新史研究の嚆矢といわれる『維新史八講』（富山房）を刊行し、順逆論の不合理性を指摘し「賊徒の巨魁」とされていた西郷隆盛を弁護している。

大逆事件の弾圧によって社会主義者や無政府主義者は、沈黙を余儀なくされ厳しい「冬の時代」を迎えることになるが、それでも日露戦争後の講和条約に反対する、都市下層民による一種のナショナリズムである日比谷焼打ち事件らしい「民衆の暴動」を底流に、中国の辛亥革命の勃発に刺激されて、藩閥政治の打倒を目指す新しい政治運動が発生する。1912（大正元）年12月に起きた憲政擁護運動がそれであり、「大正維新」の運動は、事実上ここから始まるといってよい。そういう新たな政治状況を踏まえて、雑誌『太陽』は翌年の3月に素早く「大正維新之風雲」という特集を組んでいる。そのなかで、山県の政敵であつた大隈重信は、辛亥革命を起こした孫文や黄興が犬養毅や尾崎行雄よりも若いことを述べ、藩閥政治を打倒して憲政を擁護する青年たちを激励している。犬養と尾崎は、この都市中産階級を基盤にした「立憲主義的ナショナリズム」の運動を指導する国民的な英雄として「復活したる民権政治家」を代表しているのである（小森陽一「マルクスズムとナショナリズム」『岩波講座 近代日本の文化史5』2002年）。さらに同誌の6月号に、自由主義的な政治学者の浮田和民も「第二維新の国是五ヶ条」を書き、言論の自由や選挙権の拡張などを説き、これを大正時代の新しい国是にすることを提案している。

このように「大正維新」の運動が展開し始めるなかで、田岡嶺雲に師事して

先の『明治叛臣伝』の列伝部分を執筆した田中貢太郎が、1914（大正3）年12月の『中央公論』に「田岡嶺雲、幸徳秋水、奥宮健之追懷録」を書いて文壇に登場する。貢太郎は、幸徳とも親しく接していたため、大逆事件の容疑を受けて恐ろしくなり関係書類を全て処分して、同郷の先輩・大町桂月のもとに奔り、身を潜めていたのである。また、大逆事件で処刑された和歌山新宮の医師・大石誠之助と親しかったために嫌疑を受け、危うく連座を免れた牧師の沖野岩三郎も、翌年の3月に新宮町の新玉座で政談演説会を開いて「大塩平八郎時代」から自由民権運動の激化事件にいたる多くの「憂国ノ士」の犠牲があつて現在の立憲政治も実現したと説いている。先にみた田岡嶺雲の『明治叛臣伝』や徳富蘆花の謀叛論に通じる考えである。しかしながら、こうした中国の辛亥革命の刺激を受けた憲政擁護運動も、山県有朋らの抑圧によって挫折し、再び軍部や官僚が暗躍する時代になる。そんな時に、東京帝国大学教授の吉野作造は、1916（大正5）年1月の『中央公論』に有名な「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」を書き、「民本主義」を提唱して大正デモクラシー運動を理論的に基礎づけた。また、吉野は軍部の大陸侵略政策を批判し、朝鮮や中国の独立運動の指導者に接し、かれらの運動に理解を示している。

こうした「大正維新」の運動とともに幕末維新像との関連で重要なことは、この大正時代の初めに、文学の世界で、森鷗外の短編小説「大塩平八郎」（『中央公論』1914年1月）と中里介山の未完の大作『大菩薩峠』（『都新聞』など、1913年9月12日～41年8月20日）という二つの歴史小説が、大逆事件と関係の深い作家によって書かれたことである。

森鷗外の大逆事件に対する態度は複雑である。それは、一方で、陸軍軍医総監として山県有朋と親密な関係をもち、裁判を特別傍聴したともいわれていると同時に、他方で、雑誌『明星』を主宰して短歌や詩歌の革新をとえ、明治の浪漫主義運動の中心となった与謝野鉄幹の紹介で、先にふれた平出修に西欧の社会主義運動を教え、被告の弁護を手助けしているからである。鷗外はこの小説で、天保の飢饉で苦しむ民衆を目の前にして大塩平八郎が、門人を率いて

立ち上がったものの、すぐには行動を放棄して諦めてしまう姿を描いている。そこには、獄中で判決を待つ幸徳秋水の姿が投影されているとともに、天皇制国家に内心では疑いをもちつつ、表面では傍観せざるを得なかった鷗外自身の姿をも写し出しているように思われる。また、中里介山は、堺利彦ら社会主義者たちと交わっていたために、大逆事件の容疑を受けたが、危うく難をのがれることができた。それで、日本の未来に絶望した自己の内面を、虚無的で破壊的な主人公の机龍之助に重ね合わせて、雄大な長編小説の『大菩薩峠』を長期にわたって書き綴っていくことになる。この「善悪の彼岸」を漂泊する盲目の剣客・机龍之助が、のちの時代小説に見られるニヒルな主人公の一つのモデルになっていくのである。

#### 四 大逆事件の衝撃と波紋（II）

大逆事件が、歴史書や文学作品の幕末維新像の造型に影を落としていると思われる事例は、1918（大正7）年7月に起こった米騒動以後の「大正維新」運動の展開のなかにもいくつもみられる。第一次世界大戦とその末期に勃発したロシア革命は、ヨーロッパ諸国だけでなく、中国や朝鮮などアジア諸国の反帝国主義的なナショナリズムを刺激し、朝鮮の三・一独立運動や中国の五・四運動に大きな影響を及ぼしていく。日本でも、米騒動が起こり、普選運動・労働運動・小作騒動などが盛んになり、それに伴って明治維新に規範を求める「大正維新」運動の内容も大きく変わってくる。その特徴を一口に言えば、資本主義社会の矛盾の激化に対応するために、徳川慶喜の「大政奉還」や諸大名の「版籍奉還」に見倣って、みずからの財産を進んで放棄するということである。その場合、日本の「臣民」は私有財産をすべて天皇に返還すべきであると主張するのが大本教の出口王仁三郎や浅野和三郎であったのに対して、資本家が自らの資本を人民に返すように求めたのが、幸徳秋水の盟友・堺利彦であった。堺の「維新史の教訓」（『新社会』1919年7月）によれば、現在なすべきことは、この

資本家による資本の返還であり、これこそが将来の革命の惨禍を避けるための唯一の有効な方法なのである。

堺利彦は、1921（大正10）年の雑誌『解放』の新年号特集「明治維新の新研究」に、先にみた「唯物的歴史観研究」を発展させた史学史上に重要な「ブルジョアの維新」という論文を書いている。同誌には、軍隊に在営中だったために難を逃れたプロレタリア文学の先駆者・白柳秀湖も「世界の商業主義から見た明治維新」を書いている。また、堺や幸徳たちと親交があり、平民社を経済的に支援した医師の加藤時次郎は『第二維新』（生活社、1921年）という本を書き、皇室と国民が一体化するために、大化の改新や明治維新にならって、資本や土地の国有化を説いている。こうした大逆事件と何らかの関わりのある人びとによってこの時期に社会政策的な議論が展開され、新たな明治維新史研究が生れてきたところに、社会主義者や社会運動家たちにとって「冬の時代」がようやく終わったことが示されていよう。

この米騒動以後の「大正維新」論としてさらに重要なのは、北一輝の「国家改造案原理大綱」（1919年に脱稿、のちに『日本改造法案大綱』と改題して改造社から刊行）である。北はすでに宋教仁の誘いで上海に渡り、中国の革命運動に加わった体験を元に『支那革命外史』を書き、日本の政府は西南戦争で西郷隆盛を殺してから「革命の建設」を止めて「封建時代」に「逆転」したと述べていた。こういう明治維新観に立って「第二維新」の運動を唱える北は、『国家改造案原理大綱』で、かつてない「内憂外患」の「国難」を克服するためには「国民ノ総代表」である天皇を奉じてクーデターを起こし、憲法を停止して戒厳令をしき、私有財産を制限して労働者を保護する「国家の改造」を行ない、日本が東アジアを超える広大な地域へ進出することを説いている。北は先の『国体論及び純正社会主義』で、「第二革命」を唱えて私有財産制を廃止し民主主義の実現を目指していたが、それはあくまで普通選挙権の獲得による平和的な革命であった。それが中国革命の体験を通して武力の必要性を痛感し、ここでは軍事クーデター方式を取るようになったのである。この北一輝の『日本改造法案大綱』に



刺激されて、朝日平吾は「大正維新」のスローガンを掲げて1921（大正10）年9月28日に安田財閥の当主を暗殺するが、この事件はのちの、五・一五事件や二・二六事件などの「昭和維新」運動の源流となったといわれている（久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想』、岩波書店、1956年）。また、のちに北とともに国家主義運動に奔走し、二・二六事件に関わって処刑された西田税も、同じ時期に、クーデターを起こして「大正維新の国家改造」を行うことを『無眼私論』のなかで述べている。このように、大正時代の後期には、早くも昭和のファシズム＝ウルトラ・ナショナリズムの芽がめばえてきていたのである。

この時期の歴史書や文学作品には、米騒動の影響もあって大塩平八郎の乱に関するものが多い。その代表的な著作が大塩の乱を「弔民王道の大義」を掲げた果敢な行動と称賛する石崎東国の『中斎大塩先生年賦』（大鑑閣、1920年）だが、ここでは、1921（大正10）年4月に雑誌『改造』に発表した堺利彦の「社会講談 大塩騒動」を挙げておきたい。この「社会講談」とは、知識人によって卑しまれていた講談を改革して、社会性を喪失し純文学の殻に閉じこもっている「文壇の堅壘」を打ち破ろうとした新しい講談のことである。堺はこの「社会講談 大塩騒動」で、大塩が決起したのは幕府を倒すためではなく、大坂の豪商たちを攻撃するためであるとし、その大塩の乱ののちわずか30年で幕府が倒れたように、今日の資本主義社会も、いずれ「大塩様の跡継ぎ」によって支配される日が近いことを暗示している。それは、かつて森鷗外が「大塩平八郎」で描いた否定的な評価とは異なり、プロレタリア革命の先駆者的な位置づけなのである。

最後に、大逆事件を体験した作家が、1923（大正12）年9月1日の関東大震災から昭和初期にかけて発表した幕末維新小説について二、三触れておきたい。というのは、関東大震災以後、大正後期いろいろの新聞・雑誌などマス・メディアの発達と相俟って、時代小説を中心とする大衆文学が勃興し、そのなかにこれらの看過できない重要な作品が含まれているからである。

一つは、社会講談の傑作といってもよい白柳秀湖が、1925（大正14）年1月

から2年余り雑誌『雄弁』に連載した『坂本龍馬』である。ここで、白柳は自己の階級調和論の立場から、土佐藩の下士階級出身の龍馬が、皇室中心の新国家を建設するために、大局的な観点で対立する政治勢力の一致点を見だし、その結合に尽力する柔軟な思考を高く評価している。いわば「国体」論的ナショナリズムの観点から捉えられた坂本龍馬像である。二つは、若いとき社会主義思想に惹かれたために大逆事件の嵐に巻き込まれ、岡山の実家まで警察の捜査が及んだ体験をもつ木村毅が初めて書いた小説「島原美少年録」(東京・大阪朝日新聞、1927年2～6月)である。主人公の加納総三郎は、京都の木綿問屋に生まれた美貌の剣客で、新選組に入って活躍するものの、島原の遊女との情愛に溺れて金のため辻切りまでして悲劇的な最期を遂げる。そして、その友人にはフランス革命の詩を朗吟する倒幕派の安東鉄馬が登場するなど、無産政党の立場にたった反体制のイデオロギ的色彩の強い作品である。三つは、幕末ではなく明治初年に舞台を移し、土佐藩の出身者を中心に、廃藩置県前後の混沌とした世相を描いた田中貢太郎の『旋風時代』(大阪毎日・東京日日新聞、1929年6月～33年12月)である。小説の主人公は、悪徳な華族・外山具慶の美男の下男・龍吉で、この龍吉をめぐる女たちの情痴の世界が展開されるなかで、政府頭官たちの腐敗墮落ぶりが暴露されていくのである。昭和初期のエロ・グロ・ナンセンスの時代状況を背景に、権力者を風刺することによって、密かに抵抗の意味を込めているのであろう。

このように、大逆事件に遭遇し危うく難を逃れた作家たちによる幕末維新小説は、それぞれ政治的立場は異なるが、同時代の大衆小説と比べて、いずれも政治色の強い小説であるところに大きな特色がみられるのである。それは、結局、幕末維新に題材を取った大衆小説が、戦前の厳しい言論・思想統制のなかで、自己の思想を何とか表現し、かつ民衆の心に強く働きかけられる文学の媒体であったからではないかと思われる。このことは、当然、大逆事件を直接的に体験しない多くの大衆作家の幕末維新小説についてもいえる。たとえば、その一例として、関東大震災後に「鬼面の老女」として書きはじめ、その後、戦

前・戦後を通じて国民の間で最も人気の高かった作品の一つである大佛次郎の『鞍馬天狗』を挙げることができる。大佛の鞍馬天狗は、初めこそ天皇中心的で家族中心的な思想の持ち主であったが、時代を経るにつれて平和主義的になり、1936（昭和6）年頃の「江戸日記」では、幕府政治の腐敗を憤る青年の暗殺団を配下にもつ陰の権力者・根岸丹後守と闘うために、社会の諸身分・諸階層の多様な人びとを組織する人物に変貌する。ここには、軍部を中心とするフッシュムの台頭に対する大佛の危機意識が時代小説の姿を借りて投影されているのである（鶴見俊輔『『鞍馬天狗』の進化』『講座 現代芸術』第5巻、1958年）。新選組などを相手に社会正義のため白馬にまたがって神出鬼没の活躍をする鞍馬天狗こそは、大逆事件いらいの時代閉塞のなかで、民衆が待望していた「神話的英雄」（村上光彦『大佛次郎—その精神の冒険』朝日選書、1977年）であるとともに、西欧の思想と文学に造詣の深い生粋のリベラリストである大佛次郎の時代を見る眼そのものなのである。孝明天皇の密勅を水戸藩に届ける行動的な自由人の日下部伊三治と、井伊直弼の腹心で尊攘派の弾圧に敏腕を奮った長野主膳の対立を中心に展開する大佛の『安政の大獄』（『時事新報』、1934年12月～35年9月）は、その世界的視野にたった鋭い問題関心において、幸徳秋水が先の「死刑の前」で告発した暗黒裁判とどこか共通するところがあるように思われる。

## おわりに

以上、近代日本の〈起源神話〉が幕末維新いらいの政治過程のなかで、どのようにして創出され、それがどのように変容していったかという問題を、主に明治の末期に起こった大逆事件との関連でお話してきたが、結局のところ、近代日本の〈起源神話〉とは、天皇の神権的権威を掲げて国民国家を形成しようとする「第二維新」運動の〈神話〉ということになるのではないと思われる。その場合、自由民権運動から「大正維新」にいたる運動と「昭和維新」の運動では、前者が「公議輿論」の理念を拡大し民主化する途を歩んでいったの

に対し、後者は「天皇親政」の理念を掲げ、幕末維新のラディカリズムへ回帰していったように、具体的な内容はその時々時代の課題に対応して大きく異なっているものの、いずれも天皇の国民統合の機能を妨げている中間的な権力を排除して「一君万民」の体制を実現しようとした点では共通性を持っている。したがって、これらの「第二維新」の運動は、力点の違いからみれば、最初に示した付録の図のように、この〈起源神話〉の枠内で、いわば時計の針の如く右から左へ回っていったように見えるのである。「第二維新」の運動との関連で生み出される歴史書と文学作品にみられるさまざまな幕末維新像としてその例外ではない。逆に言えば、近代日本の〈神話〉の枠組みは、それだけ強固でかつ柔軟であったということであろう。

それでは、こうした近代日本の〈神話〉の構造を突き崩すような思想とは、一体どのような形で存在していたのであろうか。最後に、この問題を先に触れた田岡嶺雲の『明治叛臣伝』を素材にして少し考えてみたい。このことは、近代日本の〈神話〉の問題を超えて、「歴史」と「文学」の関係を初めとする私たちの「歴史認識」と「歴史叙述」の問題に関わっていると思うからである。

嶺雲はこの本を書いた動機を「総叙」でまずこう語っている。そもそも「謀叛」というものは、時の権力者から見れば「一種の秩序紊乱」であるから、「謀叛人」を「一片の犯罪宣告書」によって葬ってしまうので、歴史の真実は分かりにくい。たとえば、ここに一つの殺人事件があったとすると、加害者の供述も、目撃者の証言も「事実」を完全に解き明かすことは至難の技である。なぜなら、人間の心理作用のあり方からいってどちらにも意識的無意識的な過誤が生じざるを得ないばかりでなく、「言語が元来一種の符合で、而して多義を有する者たる以上、言う者の意志と、聞く者の意思とが其語義の上に一致しない事」が多いので、伝聞が口伝いに広まっていくうちに、ついに「一個の訛伝」になることが避けられない。だから、そういう小さな「事実」を集積してできる「歴史」というものが正確な「事実」を伝えていると思うのは「妄信」であって「歴史」はただ事柄の「皮相」を伝えるだけである。こうした歴史認識にあって、

嶺雲は「所謂正史なる者は信じない」と断言する。なぜなら、たとえば日露戦争時の「公報」を見ても分かるように「正史」によって真相が「陰蔽」されることが多いからである。まして権力者にとって好ましくない「謀叛の事実」が湮滅してしまうのは当然である。だから「自由民権の大義」を唱えて「専制政府に反抗」したために「謀叛人」となって生き長らえている人たちがまだ生存しているうちに、かれらから直接に話を聞いて「明治謀叛史」を書き残しておくことが大切なのである、と。

嶺雲は、このように『明治叛臣伝』執筆の動機を語り、「謀叛は毎に進歩の促進である」と「謀叛」の進歩的意義を説き「維新革命も一種の謀叛である、幕府に対する『太平記』記者の所謂天皇御謀叛也」と断定する。明治維新が世界の革命運動のなかで特異なのは、西欧の革命のように「王室と人民との争」ではなく「皇室と幕府の争」であったにもかかわらず、その結果が「平民的傾向を帯びて現れたこと」であるという。それは、日本の皇室と国民は「家族的親子の関係」を有しており、皇室は権力を超越し、支配と服従の関係は専ら「幕府と人民とのあいだのみに」あったので、その皇室が幕府に勝ったことは、西欧で人民が王室に勝ったことと「同一の結果」をもたらしたのだと説明する。嶺雲は、そういう独自の性格をもつ明治維新の意義を「開国進取」の世界主義と「平等的平民主義」による歴史の進歩に求め、それがほどなく反転して薩長の有司専制になったとし、これに対して、自由民権運動は再び「四民平等の大義」をかかげて闘った「謀叛」であるという。そして、明治14年の政変から憲法発布までの数年は「我が明治の立憲史中最も悲痛惨憺たる時代」であるとともに「維新後の第二の小革命で、明治歴史中に最も痛快な壮烈な事実」に富んだ時代」である、と述べている。このように、嶺雲にとっての明治史の核心は、いわば「明治謀叛史」そのものなのである。

このような立場から日本の近代史を捉える田岡嶺雲の天皇観をめぐっては、実は、戦後の嶺雲研究の基礎をきづいた二人の研究者の間で、鋭く意見が対立していた。すなわち、家永三郎は『数奇なる思想家の生涯―田岡嶺雲の人と思想―』

(岩波新書、1954年)で、嶺雲は夏目漱石などと同じく、明治天皇の訃報を知って「天慟地哭の悲報」と書くような忠良な日本臣民であったと評したのに対し、西田勝は「田岡嶺雲の天皇観」(『近代文学の潜勢力』八木書店、1973年)で、そうした表現は嶺雲のイロニーであって額面通りに受け取ってはならないと主張した。西田によれば、嶺雲の語る『明治叛臣伝』の執筆動機の背後には、幸徳ら無政府主義者たちと同様に、自由党左派の激化事件の研究を通して「権力転覆の手段の模索」をしていたのではないかとされている(『田岡嶺雲『明治叛臣伝』の意義』『近代文学の発掘』法政大学出版局、1971年)。かつて「予をして露国に生れしめば、予は爆裂弾を抱くの虚無党に与したらむ。或は予をして清国に生れたらしめば、予は恩巡撫を斃せる徐錫林の徒たりしならむ。(中略)偶々日本に生れ、聖代の余沢、閑に病余の身を養ふを得る、予に於て幸の至、福の至り也」(『長田村にて』『大阪日報』、1907年8月?)と、皮肉と自嘲をこめて語っていた嶺雲ならそう考えても不思議ではなからう。

それはともかく、大日本帝国憲法下の思想と言論の統制は厳しく、とくに天皇制の批判に関してはまったくタブー視され、嶺雲の著作は次々と発売禁止となり、嶺雲はこれまでの評論とは異なる新しい思想表現の方法を模索せざるを得なかった。その苦悩の一端は、晩年の自伝『数奇伝』(玄黄社、1912年)のなかで、自分にもし文学的才能があれば「寧ろ議論の筆を捨て、自分の思想を小説に現はした」かったと嘆き、そうすれば同じ思想でも検閲官はこれを看過するであろうと語っている。嶺雲のそうした想いは、一種の記録文学であるこの『明治叛臣伝』において多少はかなえられたとしても、それはかなり屈折したものとならざるをえない。だから、友人の白河鯉洋の序文に「吾国に於ける古来一切の叛臣は、一も朝敵たるものなく、挙げて時の政府に反抗せるものならざるはなし」と書かれていても、その言葉をそのまま信じるわけにはいかない。たとえば、北一輝は、先の『国体論及び純正社会主義』で「日本民族は皇室に対しては悉く乱臣賊子にして、例外の二三のみ皇室の忠臣義士なり」と断定しており、現に、自由民権運動の代表的な激化事件である秩父事件でも「乍恐、

天朝様ニ敵対スルカラ加勢シロ」と農民に檄を飛ばしているからである。したがって、嶺雲が序文で、この本を今の青年に勧めるのは「聖代豈に復た敢て当年不祥の事を学べといはんや。唯意気地なき今の青年が、此の一身を以て公道に殉じて悔いざる底の意気志業に感奮する所あらんことを望めば也」と言っても事態は同じである。これらの言辭はむしろ当局の眼をのがれるためのカムフラージュであり、反語と解するしかないように思われる。

こうした苦渋に満ちた表現をとった田岡嶺雲の『明治叛臣伝』が刊行されてからわずか半年余り経て、人びとを驚かせ、恐怖させたあの逆事件が起こったのである。そのとき多くの文学者は、夏目漱石のように驚愕して沈黙したが、永井荷風のように江戸の戯作文学に韜晦するものもあった。そして、先にみたように、石川啄木や森鷗外などごく少数の文学者たちだけがわずかに逆事件に触れたり、それを暗示する作品を書いたに過ぎない。つまり、近代日本の〈神話〉を構成する核心的な理念である「天皇親政」を批判することは、たとえ小説というかたちをとっても、余程の巧みな文学的虚構を用いなければほとんど不可能に近いのであり、せいぜい、薩長藩閥政府や官僚批判に止めておくしかないのである。だから、日本の近代社会には「社会科学の導入があっても、文学作品による思想表現への過剰なほどの代替は続いた」（鹿野政直『近代日本思想案内』岩波文庫、1999年）という特殊な事情を考慮しつつ、少なくとも敗戦以前の近代日本の〈神話〉を突き崩す思想を解説するためには、かなり困難な文献の読みと努力が必要とされるであろう。田岡嶺雲の天皇制観も、そうした近代日本思想を解説する重要な試金石の一つと言っていいのかもしれない。

〈付録の図〉 近代日本の「神話」の構造と変容の図

